

視機能の低下と視環境設計

和 氣 典 二

(神奈川大学人間科学部)

近年、QOL (quality of life, 生活の質あるいは生命の質) が問題にされはじめ、視環境の評価に利用しようとする気運がある。高齢化社会に突入したわが国では、高齢者や種々の障害を有する人々が心身ともに健康に生活できるように環境の設計、生活設計を支援する必要がある。そのためには、種々の側面でのQOLの評価法を確立しなくてはならない。私どもは、高齢者やロービジョン者のQOLの評価法だけでなく、これから発展すると思える地下街におけるQOLを保つため、環境がどうあるべきかについても研究している。そこでは高齢者やロービジョン者のQOLの評価法だけでなく、QOLに及ぼす視機能にはどんなものがあってそれに合うように環境面を整備すると、QOLがどの程度高まるのかを検討している。また、地下街のような特殊な環境では、自分がどの方角にいるのか、地上の方角との関係がわからなくなる。これらをどのように解決していくかは今後に課せられた大きな課題である。

高齢者やロービジョン者のQOLの研究から「視認性」や「家事を行うときの気づきにくさ」など視覚的注意が関係することが多い。ところで、高齢者はすべての条件下で若年者の視覚的成績より劣るとは限らない。環境条件がよければ両群に差はない。だが、低照度照明とかコントラストが小さい場合などのように環境条件が貧弱になると、顕著な差が生じる。このような成績の低下は環境面の改善でどの程度補えるかを検討し、環境設計に活かされれば、QOLはより高まるであろう。地下空間の研究から地下空間に対する負のイメージ、利便性や誘導性などが解決すべき事柄であることが指摘された。利便性はエレベーターやエスカレーターなどを設置することである程度改善される。負のイメージは地震などに対する強度や避難の問題などである。誘導性については「自分の行き先がわかりにくい」とか、「地下空間と地上との関係がわかりにくい」などである。これらを改善するには視認性や視覚的注意に基づく誘導方式を新たに考えるべきである。地下空間は年齢層、視力や視野などさまざまに異なる人々によって利用される。だから、環境設計の資料として「視機能の低下と視覚的注意」あるいは「環境条件と視覚的注意」との関係についての資料を用いるべきであろう。